女医をめざすあなたへ

おんなのはながさきそろう

東海大学医学部解剖学刊

女医をめざすあなたへ

おたくさの
はながさくころ

東海大学
医学部
解剖学刊

おたくさの
はなが
さくころ

わたしは
季節の風を感じながら
心のふる里を求めて旅に出る
奈良、京都、鎌倉、
仙台、金澤・・・・・

もし
医学の古径(みち)を求めて　旅に出るとしたら
どこへ？

とりごえ　こうじゅん

倭(わ)あじさいに魅せられて
お　たくさ　と
妻の名を冠した
シーボルトに会いたくて
そして
愛娘イネを
女医第一号に育てられた
ドクトル　フォン　シーボルトに会いたくて

おたくさの花が
八重、十重に咲く頃
長崎へ
出かけよう

ご遺族さまからの手紙

母・佐藤正子を思う

竹内　しのぶ

母・佐藤正子は、大正二年八月十三日、兄弟姉妹七人（男三人・女四人）の長女として、大阪で誕生しました。

母は学校卒業後、女学校で英語の教師をしていましたが、医師になることを志して、東京女子医大で学び、医師となりました。学生結婚をし、私と三才年下の弟の二人の子供を産み育てました。父は私が三才の時死亡しました。父は母の仕事に理解ある人で、「患者が良くなるまでみてあげるように」と申していたそうです。

母が最初に勤務したのは飯田橋にある東京逓信病院です。当時、女医が珍しい時代でした。父が亡くなってから、母は池袋に開業しました。私が思い出すのは、朝早くから夜遅くまで働く姿です。昼食を食べている時でも患者が来ると、食事を中断してもみてあげていました。内科、小児科、産婦人科と、医者をもう一人頼んでやっておりました。夜中の往診もしていました。

母は一人で父であり、母であり、そして医者であり、一人で何役もしていました。

母は本当にがんばりやさんでした。生活の苦しい人からはお金をいただかず、優しいことばで患者に接していました。ある患者さんはこんなことを言っていました。「ある先生は高価なトラのカーペットを敷いているのに、正子先生は赤ヒゲ先生だ。」と。母は人のため、患者のため、身を削って一生懸命働いていました。池袋の開業時代は食事をゆっくりとることも出来ない程毎日忙しい生活でしたが、この時の母は輝いていました。

昭和四十二年（一九六七年）頃、少しは落着いて静かな生活がしたいと言って、神奈川県海老名市国分寺台に引越し開業いたしました。こちらに来てから、五十才で車の運転免許を取りました。東名高速道路ができる頃でした。運動神経があまりよくないので、車での往診も大変だったようです。畑の中に落ちたりして、工事のおじさんに助けてもらったり、往診の時に、先生に運転して来ていただいては大変だといって迎えに来てくれることもあったようです。海老名に来ても静かな生活になったわけでもなく相変わらず多忙で手術などもしていました。休日に男の先生は家にいなかったり、お酒を飲んでいたりということもあって救急車の人も母の所に患者を連れて来たりしていました。そんな訳で母は誰からも慕われていたと思います。

七十才前後で仕事を辞め、東京・目黒に住み、東大の講義に十年位通って、新しい知識を吸収しておりました。また健康のことも考えプールに八十八才まで通い、生きがいをもって生活しておりました。八十九才で倒れるまで、朝は三時頃起き、四時朝食、ラジオで勉強しておりました。そして夕方四時に夕食を食べ、早寝早起きを実行しておりました。私の娘には、「女性でも一生懸命がんばって勉強するように」と言っておりました。人の手を借りるようになり、約二年娘のそばで生活し、九十二才・平成十八年一月八日死亡しました。

生前より、自分亡き後は、東海大学医学部の学生さんのために献体することを決めておりました。医学を志す皆さんにお役に立てたことを母は喜んでいると思います。

二〇〇七年一月

ご遺族さまからの手紙

姉・佐藤正子を語る

廣實憲治郎

姉、佐藤正子は、貿易商、廣實儀一（ひろざねぎいち）・住子（すみこ）夫妻の七人の子の最初の子として、大正二年に大阪市で生まれました。これに続き、女の子が二人、その後で男の子が四人生まれました。それぞれの子の間には、四～五才の年令差があり、この為最年少の私と正子との間には、十八才の年令差がありました。

父は、当時大阪の外人（多くは中国人）が多く住む居留民地区のあった、大阪市西区に会社を構え、住居は阪急沿線の宝塚に近い、「花屋敷」と云う住宅地にありました。

父は当時商売が順調である上に、はじめての子供なので、正子には甘く、種々のものを買い与え、色々のことも経験させたようです。

夏には海辺に家を借り、海水浴三昧の生活を過ごさせたり、登山に連れて行ったりしたようです。鉄道網も未整備な小学生の頃に、上高地に行ったと申してました。

長じて、大阪府立大手前女学校に通学するようになってから、当時まだ女性の社会進出が極めて少ない時代に、女医さんになっている先輩のことを知って、大きいショックを受けたようです。これが医学に進む動機になったようです。

一度は貿易商の父の願いを受入れて、女専の英文科を卒業し、母校で教壇に立っていましたが、父が満州（現在の中国東北部）へ事業の拠点を移し、併せて一家が移住した後で、一人日本に残って東京女子医専に入学し、念願の医学の道に進むことになります。以降卒業后、逓信病院でお世話になり、昭和十五年に結婚、二人の子供を授かり、戦時下に夫の家族と一緒に静岡に疎開すると云う、医師としてブランクな時期を迎えています。

終戦後、東京荻窪に居を構え、夫が若死にすると、家事、育児を託せる人を雇って、麹町にある東京電信電話局の診療室に通勤医をはじめました。その後、北池袋で佐藤医院を開業。更に二十数年後、小田急が海老名団地を開発、土地発売の折に、お誘いを受けて、その団地内に佐藤医院を移し開院しました。

正子は「医は仁なり」をモットーにしておりました。この一例が、時間外に訪ねて来られる患者さんにも、嫌な顔をせず診療に応じていました。救急車も随分患者さんを運んで来ていました。

救急車と云えば、こんなことがありました。海老名で運ばれて来た患者さんが、治療も終わっていないのに「仇をとりに行くんだ！！」と暴れ出したのを見て、正子が「自分の生命を大事にできない人は、勝手に行って死んでおいで！！」と一喝すると、ヤクザ風のその患者さんは、処置台の上にスゴスゴと戻ったそうです。

この海老名で開業をはじめた頃でしょうか、「私は東海大学病院に献体するから」と云うことを正子からはじめて聞きました。

この献体のことを、どなたとお約束したのかは聞きもらしましたが、同じ医の道で意気投合させて戴いた先生が貴大学にいらっしゃったのだと思います。その方の為に自分の身体が少しでもお役に立つものなら・・・と、何のためらいもなく献体を申し出たのだと推察をいたします。人生の節目節目で常に度胸よく男勝りに自分の進路を決めて来た人でしたから。

正子の身内の者として、慰霊祭等で貴大学医学部の皆様の真摯なお姿に接する機会を得て、正子の選択は正しかったのだ、これでよかったのだと強く感じております。

末筆ながら貴医学部の益々のご発展と、御関係の皆様のご活躍を祈念申し上げ、拙文を終わらせて戴きます。

ご遺族さまからの手紙

祖母について

竹内　理香

一

振り返る良い機会なのかもしれない。最後に祖母に会ったのは二〇〇四年の夏だった。まだ介護サービス施設に居た頃だ。歩くのが随分ゆっくりになっていて施設の外を一周するのが精一杯だった。暑かった事もあるのかもしれない。部屋に戻って二人で向かい合った時、うれしいようなそれでいて寂しいような気持ちになった。足腰が衰えたのを目の当たりにしたから、ではない。「会話」が出来たからだ。

「会話」と言うには内容も少なく時間も短かった。だが祖母が何かを言い、私がそれに対して意見を出す、という事が成立したのだ。体力の衰えにより私が口を開くよりも早く言葉を出す事が出来なかっただけなのかもしれない。それとも内容にそれほど興味がなくしゃべるのが億劫だっただけなのかもしれない。経緯と理由はともかく会話らしい事をすることが出来た。

私の記憶の限り話を聞いてそれに対して意見を交換、という事はなかった。言っても全く考慮されない。頭から否定される事が怖くて言葉を飲み込む事もあった。常に会話は一方的だった。トロい子供の話などいちいち聞いていられなかったのか。

二

朝食はホットプレートで食パン二枚と卵の片目焼き。丸くて平たい缶からバターを一さじ。コーヒーと一緒にとっていた。その間にNHKラジオで英会話、ドイツ語を二十分ずつ。晩年はハングル語も勉強していた。

新しい物好きだった祖母はその時々の流行りものや面白い物を逐一おさえていた。女が車を運転している、と嫌がらせされたと言う。封切されたばかりの『フラッシュダンス』を、早速、見に行き「良い映画だからあなたも行け」と言う。定番の週刊新潮の他に創刊されたばかりの「フォーカス」（スキャンダルものより政治的スクープ等ジャーナリズム色が強かった）を毎週購入。おいしいものが大好きで新しいレシピを手に入れては試していた。切干大根を煮るのにケチャップの隠し味というのも祖母がくれたアイディアだ。アワビも飼い犬と分けてよく食べていたようだ。庭に貝殻がよく転がっていた。

もちろん時間の経過を問わず価値のあるものは大切にしていた。大きな火鉢や赤い布をめくって使う鏡台は私も大好きだった。漢方も診療所で処方する事はなくても自分では使っていた。小さな家庭用の風呂は苦手で、上池袋では「梅の湯」に毎日通っていた。

週末には松田の寄という所にあったセカンドハウスによく一緒に出かけた。軽自動車の後部座席の私は毎回エチケットシートのお世話になっていたが、それ以外は素敵な思い出だ。夏休みに出かける田舎のない私にとって、唯一のお泊りイベントだったのだ。この家までの道が大変細く、田んぼのあぜ道のようなところを車で進んでみたり後退してみたり。いつ水田に落ちるかと内心冷や冷やしたものだ。今はこの村も大分変わってしまったらしいが、川の水は夏でも氷のように冷たかった。大きな木が沢山あって木登りには困らなかった。昆虫もごろごろいた。枯葉を集めて焼き芋もした。

現役を退いた後も水泳、読書、映画、講演会、俳句、旅行、等々趣味は多岐に渡っていた。長年の一人暮らし。家には要介護の老人もなく、夫や子供に縛られる事もない。リタイアから二十年間健康に恵まれ、好きな事を好きな時に出来る幸せな第三の人生。なんともうらやましい限りだ。

初孫だったので多分それなりに可愛がられたのだろう。字を覚えたばかりの私との筆談メモが引き出しから出て来た。私が本好きになったのは祖母の影響だと思う。ホテルは旅館とは違うから使い方を知らねばならぬと十五になると高級ホテルに一泊で連れて行かれた。確かにお風呂の使い方は知ってよかった。高級レストランにもしばしば連れて行かれ、お子様ランチなどもっての外、「血のしたたるようなステーキ」「オニオングラタンスープ」等、大人同様一人前を小学生低学年の私にとってくれたものだ。オープンカーに入った旗の立つケチャップライスをせめて一度は食べてみたいと思ったものだ。

病気になれば時間を問わず診てくれた。

玉にきずであったのが「悪い子は注射しちゃいますよ」。このおどし文句はあまり良い趣味ではない。実は気の短い人で、美味しいものを外でご馳走してくれてものろのろ食べる（つまるところ味わっているのだが）私を前に、用意したお会計を持つ手がいつもプルプル震えていた。

振り返れば祖母との楽しい時間もあったのだ。

三

もし自分が医師になったのはこういう理由でこの職業はこれこれこうで大変素晴しいのですよ、あなたもどうだろうか

という流れであったなら、おそらく私も医療に従事する道を選んだであろう。しかし私が今日医療に全く関係ないところにいるのは、社会階級の違いは埋めがたいとしていた祖母の価値観への反発からだ。

医師として患者を優劣なく診ていた筈なのに、何か独自の優劣判断基準があった。私の父を農家の出身で大学中退、しかも離婚経験のある馬の骨だという。誕生日にもらった図書券で乱歩の少年探偵団シリーズを購入した事を報告すると、くだらない本など買ってと即刻批判された。

進路の相談でもそうだった。高校卒業後はある職業につく事を考えていると言ったところ、返ってきたのは高卒や専門卒という「不名誉な経歴」でなければいい。とりあえず大学という名前の付くところに行ってくれという言外のメッセージであった。おそらく「勉強は一生涯続けられるが社会に出るとなかなか自分の思い通りにはならない、自由な学生のうちに出来るだけ学んでおきなさい」、という事ではなかったのかと今では思う。しかし好きな道で能力を伸ばしてというアドバイスを受ける事はついになかった。結局選択の余地はあまりなく、大学に一旦入学してしまうと受験用に取って付けたような目的も消滅し、大学生活に興味を

なくす結果となった。レールに乗らず情熱を持って自分の意志を通すべきだったのだが今となってはもう遅い。

二才年下のいとこは男で医師になる道を選んだ。その事により私はある時点で切り捨てられたと思っている。留学の相談をした時も、目的やその判断に至った経緯を尋ねる事なく電話を則、切られたり文字通り耳をふさがれたりもした。今思えば、同時期に実の息子と色々あったのだろうが、それにしても金の無心と思われたのが悲しい。ひ孫が生まれる事を告げた時、相撲を見ながら「出来てしまったものはしようがない」と言った。祖母には正月の挨拶以外連絡をする事はなくなった。

再び顔を見に行くようになったのは倒れて一人で暮らせなくなってからだ。皆で行くと割と喜んでくれていたように思う。どうも元来新しいものや舶来ものに弱い事から「欧州に住む孫と日本人でないその家族」が新たなステイタスになったらしい。隣室の人との握手会に発展した事もあった。

祖母は職業人として成功した部類に入るのであろう。ただ一般家庭の一構成員という面ではどうであったか。夫を早くに亡くし苦労はした筈だ。生き抜くために職業人であらねばならず、家庭を犠牲にする事になったのか。

四

生い立ちも、何故、医師になったのかも知らない。だから知っている部分だけでその人の人生を例え個人的であっても判断評価は出来ない。関西の裕福な家庭の長女として生まれたという。満州にいた時期もあったらしい。足が恐ろしく変形していたのは、小さいころから可愛いけれど形の合わない外国製の靴に足を押し込めていたからのようだ。医学部に行く前は英文科にいたとも言っていた。

つまるところ誤解されやすい人だったのだと思う。特に自身の家族からの誤解だ。弟の面倒を半ば親として見る長女、奔放な夫を持つ妻、二人の幼い子供を持つ未亡人、体を壊した娘と手に余る息子を持つ母。それぞれの役割ごとに周囲から誤解を受け、または利用される事があった。そしてその誤解をあえて解いたり理不尽に立ち向かう事もしなかった。黙っていても、時が解決してくれると思っていたのではないか。いくら正義は勝つと言っても多少は個人の努力あっての事なのだが…。彼女の信じるところの神の最終審判を待っていたのかも知れない。

正直なところ、この文章の書き始めは祖母に対する批判的な内容ばかりが筆先から溢れてきた。記憶の彼方に封じられていたいくつかの思い出が戻るにつれ、

少しは距離を持って祖母と私の関係、そして祖母自身を見詰め直す事が出来たように思う。祖母の事は好きにも嫌いにもなれない、それが結論だ。特別な愛情もない代わりに怨みもない。

取っ手に古ぼけた包帯を巻かれた小さなフライパンの中にはいつもおいしいものがグツグツいっていた。食卓に出す時、八分目にすればいいのに何故か毎回溢れんばかりにうつわによそってしまう。二人で台所をそろりそろりと歩いたものだ。形見にはこのフライパンをもらった。

亡くなった今はこのフライパンと壁の白黒写真の向うに映る「ある時代を生きたある女性の生き方」を時折眺めている。

振り返り一区切りする機会を与えてくれた方々にお礼を言いたい。

二〇〇七年九月二日

ご遺族さまからの手紙

I am very proud of beeing

My name is Cleber Carnevalli Sato. I am the son of Ryusuke Sato and the grandson of Masako Sato. I was born in Brazil because my father immigrated to this country and married my mother, Odila Sato an italian descendent that was also born in Brazil.

The first time that I met my grandmother I was 10 years old when she came to Brazil. I always heard about her from my father. I knew that she was doctor and I was very anxious to meet her because she was one of the first women in Japan to graduate in Medicine.

She was always an example for me in all my life. She lived and worked in Tokyo when Japan was in war and I can imagine that it was horrible. My aunt and my father were born when people in their country were starving. And my grandfather died when my father had 9 months. She was really a very strong woman.

In 1985, 1987, 1989 and 1994 I traveled to Japan and stayed in my grandmother's home in Ikebukuro. Then I could know better the japanese culture and language and meet my relatives.

When I first met my grandmother I also decided to become a doctor and so I did. I studied hard and entered the University when I was 17 years old and I graduated when I was 23 years old. Then in 1997 I started the residence in gynecology and obstetrics. I know that my grandmother was also a gynecologist.

In 2001, once again I went to Japan to study at Keio University and I lived in Japan during one year. In this pleasant time I could talk long times to my grandmother and know better her way of thinking. The next year I returned to my country. Unfortunately, that was the last time that I could see my grandmother alive because she died in January of 2006. In the month of may of 2007 I visited Japan to see my grandmother mortal rests.

I am very proud of beeing Masako Sato's grandson. I pray everyday for her spirit to be illuminated and to guide my family in our lives.

CLEBER SATO

CLEBER SATO

ROPE

ご遺族さまへの手紙

「大先輩　佐藤正子女史」

奥野　智織
（東海大学医学部医学科二年）

佐藤正子様、この度は御身体をもって本当に沢山のことを学ばせていただきました。誠に有難うございました。ご協力いただきました御遺族のみなさまにも深く御礼申し上げます。

実習が始まるまでの長い長い夏休み、恐れと不安でいっぱいになった私は幾度となく「どうか可愛らしいおばあちゃまの御遺体で学ばせて下さい」と念じておりました。全ての御献体は私たち医学生への万感の想いがこめられた贈りもの。本来このようなことは少しでも考えてはいけないことなのでしょうが、その時の私の正直な気持ちでした。はたして、九月に実習室で初めてお目に掛かった正子様はとても可愛らしい、というよりもむしろとてもお綺麗なおばあさまでした。その時から恐いという気持ちはスッと消え、自然なかたちで実習に入っていけたように思います。約半年間におよぶ実習は初めて経験することばかりで体力的にもきついものなのですが、その折々で正子様の穏やかなご表情にはずいぶんと支えていただきました。実習中に疲れがた

まってきて、ふと手を休めてお顔を拝見いたしますと、いつも凛とした空気に包まれて、崇高なまでのお顔がありました。正子様を担当させていただいた班員全員が特別な思いを抱くようになるのに時間はかかりませんでした。実習中はまだお名前もわからなかったのですが。「私たちの」「大切な」存在として、毎朝お目に掛かるとごく自然なかたちでご挨拶ができ、実習を離れても折に触れ思い浮かべ、様々なことをお話させていただくまでになりました。そんな「私たちの」「大切な」方がどのような人生を歩まれてきたのかという関心が日を追って高まっていったのも自然な流れだったように思います。

実習最終日、納棺に際し、初めて私たちはお名前を確認させていただきました。ようやく「正子さん」とお名前で呼ばせていただけるようになりました。お嬢様からのお手紙も拝読させていただきました。そこには生き生きとした正子様のお姿がありました。御遺体としてではなくまさに身近な存在としての正子様が私たちの中で繋がりました。

正子様は私たちの大先輩だったのですね。困っている患者さんを数多く助けてこられたのですね。現役を退かれても学び続けられたのですね。お話を伺えば伺うほどご生前にお目に掛かりたかった。そして改めて医師になるための大切な第

一歩を御一緒していただけましたことを大変嬉しく思いました。

この頃、人の世における不思議なえにしというものを感ぜずにはいられません。日常の些細なことからはじまる全てのことが、そして自分に関わって下さる全ての方々が偶然ではなく必然なのだと思えます。正子様はきっと私たちを選んで下さったのだという自負を胸にこれからもそれに恥じないよう努めてまいりたいと思います。

本当に有難うございました。

二〇〇七年二月二日

ご遺族さまへの手紙

「出会えてよかった」

田巻 佐和子
（東海大学医学部医学科二年）

ご遺族の方々へ

はじめまして。お手紙ありがとうございました。

おばあさんがどんな方だったのか知りたかったので、とても嬉しかったです。私は佐藤正子さんに出会えて本当によかったです。お手紙を読んだときにそう思いました。

私達が初めてお会いしたのは九月六日でした。私は前日から緊張していてあまり食事も取れませんでした。そしてついに実習がはじまり、おばあさんの安らかに眠っているお顔を初めて拝見しました。そのお顔をみて少し落ちつき、その日の午後にはもうしっかり食べて元気に実習に励むことができました。実習中、どんな方だったんだろうという話もでました。とても綺麗なかただよね。とか聡明な感じだよね。と色々みんな好きに話していました。

私達の班はulna（尺骨）という名前でした。私を入れて四人のチームです。私以外は学士編入で二年から入学してきた人たちで私はあまり交流をしたことがあ

りませんでした。始めは不安要素がいっぱいの班でしたが、解剖実習を重ねるごとに仲が深まりました。ほぼ毎回最後まで残って解剖し、その後も勉強会を開いたりしてみんなで勉強しました。勉強会も回を重ねるごとによいものとなりました。それぞれが分担したところを予習してプリントを作って他の班員に説明する。単元ごとに行う試験では、班の成績で上位を取ることができました。一番を二回取ることもできました。班員と協力して、試験に追いまくられながらも乗り越えてきました。そうして迎えた一月三十一日。納棺の日です。もっと勉強したいことがあると思いながらも、ご遺族にお返しするために、私達の手で感謝の気持ちを込めてお棺にお納めしました。そのとき棺に書かれたお名前をみて初めて佐藤正子さんというお名前であると知りました。そして更に遠藤さんが棺に正子さんに宛てたメッセージカードを置いていきました。それを読んで初めてお医者さんであったことを知りました。班員みんなが「そうだったんだぁ」としみじみ言いました。しっくりはきましたが、でも驚きでした。昔は女性で医者になるのは大変だったと思います。正子さんが医師になるまでにはきっとご苦労があったのではと思いました。そしてその日の最後に、鳥越先生からご遺族からお手紙をいただいている

とお話があり、班員を代表して奥野さんが二年生全員の前でお手紙を読みました。奥野さんはすぐ泣きはじめてしまい、読むのが大変そうでした。でも私達の誰が読んでもそうだったと思います。感謝の気持ちと素晴らしい方に出会えたことの嬉しさ、様々な思いが溢れて、その日はみんなでわんわん泣きました。

正子さんを医師として、一人の女性として本当に尊敬しています。患者さんのためにと休日も働いて、患者さんに慕われて。今だからこそ時代の流れから患者さんを思いやってとか患者さんを第一に考えてと叫ばれますが、昔はまだそうではなかったはず。その中で患者さんを第一に考えて医療に従事されていた。強い意志がなければ出来ないことだと思います。一線を退いてからも向学心に燃え、東大の講義を聴かれたり、ラジオで勉強されたり、プールに通って楽しく過ごされていたその生き方には圧倒されます。きっととてもパワフルな方だったのでしょうね。解剖を終えた今でも、正子さんに「しっかり勉強してね」と言われているようです。そしてそれがこれからもずっとそうであると思います。私はこれからの人生の目標に出会えたのですから。

最後になりましたが、私達にこのような機会を与えてくださったご遺族の方々、本当にありがとうございました。感謝の

気持ちでいっぱいです。解剖実習で学んだことは解剖学だけではありませんでした。正子さんから様々なことを教えていただきました。私達は来年度三年生になりますが、ここで学んだことを胸に更に勉強に励んでいきたいと思います。

二〇〇七年二月五日

本誌編集を終えるにあたって

遠い星空のむこうで
微笑むあなたへ・・・

「夢は叶えるもの、叶うもの」あなたはそう私達に教えてくれました。
人は夢に向かって走っている時、光り輝き続けるのだと・・・。
たとえその途中にどんな困難や予期せぬ出来事が待ち受けていようと乗り越えられるのだと・・・。
そしてそれを成しとげた時、静かな時を迎えられるのだと・・・。

あなたに初めてそして最後にお会いしたのは二〇〇六年一月十一日の寒い寒い日でしたね。
霊安室で医学生たちと共にお迎えした時のあなたの穏やかで端正なお顔、その中にも聡明さを物語る口元、また、たくさんの方々のお見送りが印象的でした。あれから一年。実習終了後のご納棺に際して、女子医学生が読み上げたご家族様からのお手紙が本誌発行のきっかけとなりました。この企画に賛同し快くご協力してくださったご長女の竹内しのぶさん、ご末弟の廣實憲治郎さん、フランスからは辛口ながら人間味溢れる回想録を寄せて頂いた愛孫娘の竹内里香さん、また、ブラジルで産婦人科医をなさっておられるお孫様の佐藤クレベールさんからもお手紙が届きました。

皆様からのお手紙を拝見した時、私は確信しました。
あなたは満足する人生を送られてきたと・・・・・。
そしてとても幸せだったと・・・・・。

女医として、母として、そして何よりも一人の人間として、自らの決めた道を精一杯生きたあなたが、人生の最後に成し遂げられた「献体」。その「大切な思い」はしっかりと受け継がれていくことでしょう。

どうぞ、医療の現場で働く女性たちがあなたのように夢と希望を持って仕事を続けられますようお見守りください。

二〇〇八年　早春

かしこ

佐藤正子様へ

遠藤京子より

編集にあたり、その趣旨を深く理解して多数の方からご協力を頂きました。表題を書いてくださった港北出版印刷(株)の鈴木ゆみ子さん、挿絵を担当してくださった本学篤志献体の会会員の坂口房子さん、原稿をタイプしてくださった生体構造機能学事務の岡田まさみさんにこの場を借りて心より感謝申し上げます。

女医をめざすあなたへ
おたくさのはながさくころ

発　行　日　2008年1月11日
編　集　者　遠藤 京子（東海大学 篤志献体の会 事務）
発行責任者　鳥越 甲順（東海大学 教授）
発　行　所　東海大学医学部解剖学
〒259-1193 神奈川県伊勢原市下糟屋143
電話 0463(93)1121
印　　刷　港北出版印刷株式会社